

キリストへの時間

「キリストへの時間」協力委員会報

「キリストへの時間」の強みとは？

金城学院大学文学部宗教主事 落合 建仁

最近、私は「キリストへの時間」の歴史について、キリスト教系雑誌の一つである『季刊教会』第 99 号 (日本基督教団・改革長老教会協議会・神学委員会、2015 年) に寄稿・紹介する機会を与えられました。執筆のため、私は過去の記録を丹念に読み返しましたが、その際、とりわけ強く思い巡らした点があります。それは、「キリストへの時間」の将来とその可能性についてです。

1952 年 10 月 27 日に放送が始まった「キリストへの時間」の、1974 年頃のリスナーの傾向は「若者が 60～70%を占めてい」ました。ところが、1985 年頃から「病床者、高齢者の応答が見られる」ようになり、1989 年には「若者の応答は全くなくなった」との記録がありました。以後、その傾向は続き、むしろメディア環境の大きな変化、放送のための資金を巡る苦しさを相次いで経験します。こうした現実を改めて直視する時、一見、ラジオを使った伝道はもはや意味を持たない営みとなってしまったのか、とも思われます。

しかし、私はその時、次のような意義も新たに見出すことができたのです。それは、「地上波の民放ラジオから流れるキリスト教放送」ならではの特別な意義です。つまり、民放ラジオをインターネット経由で聞くのでも、宗教専門のラジオ放送局で聞くのでもない、特別な存在の意義です。

実は現在、かつてキリスト教国と言われたような外国でも、ローカルラジオ局でキリスト教番組を流すことの意義について、私たちと同じような問いに直面しているのですが、ある人が、ローカルラジオ局を通じたキリスト教放送の意義についてこう強調していたのです。それは、放送を通じて、人々が福音のメッセージを聞こうと意志する

よりも前に福音のメッセージを受け取る備えをさせることができる点である、と (Josh Reid, *Powerful Christian Radio*, 2014)。どういうことかと言いますと、たとえば、私たちが家族や友人に面と向かって教会に来て礼拝説教を聞いて欲しい、と言っても、多くは無視され、あるいは一笑に付されます。けれども、ラジオは面と面に向かいあわないし、さらに民放ラジオの場合、一度つけたらそのまま聞き流すという傾向が強いものです。そうして、心を開いたまま福音のメッセージに触れ、教会へ踏み入れるよりも前に“福音の種”を受け容れる素地を整えてくれる可能性がある、というものです。

また、1990 年代初頭より、キリスト教諸学校が「キリストへの時間」に携わり始めたことも、その可能性をより強固にしたものと思います。なぜならば、番組の最後でいわゆるスポンサー紹介のアナウンスがなされますが、その際、学校名が出ることによって、「ああいう学校と協力してやっている放送なら、…安心して聞ける」と言う人も出てきて、番組への「信用度を確かにするようになった」からです (『協力委員会報』第 23 号、1994 年より)。

確かに、今はインターネットでいくらでも説教を読み、聞くことができますが、その場合たいていは、インターネットを操作する個人が自らの意志でそのサイトに辿りついて、読み、聞く場合がほとんどでしょう。リスナーが、意志せずして—それも心をリラックスさせた状態で—福音に触れる可能性があるというのは、ながら作業の中で聞く民放ラジオ、そして「キリストへの時間」の強みなのではないでしょうか。

「敵意を滅ぼすキリスト」

原 科 浩

(日本キリスト改革派名古屋教会長老)

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自身の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。エフェソの信徒への手紙2章14～16節おはようございます。

私たちはみな平和な世界であってほしいと願っています。しかし悲しいことに、世界中のいたるところで常に戦争が起こり、争いも絶えません。平和がない状態、平和が壊れているときには、必ず分裂が起こり、その2つの間には敵意があります。

聖書にも2つのグループ・2つの人々が登場します。イスラエル人と異邦人・外国人です。

イスラエル人には律法、神の言葉が与えられています。まことの神様を指し示し、やがて来られる約束の救い主をお迎えするために、その備えをするようにと、神様が特別に選び出した民族です。神様の言葉をあたえられたイスラエル人はそれを誇りに思い、神の言葉を知らない外国人を軽蔑しています。

一方で、当時のイスラエルは、ローマ帝国すなわち外国人に支配されていました。外国人たちは、このように思っていたのではないのでしょうか、イスラエルが神の言葉をもっていると言っても弱くて小さな国ではないか、私たちの方が経済力もあって豊かだ。軍事力も強大でどの国にも負けることはない。結局はこの力が私たちの正しさを証明しているのだと。

イスラエルの人々も、自らの正しさを、神の言葉である律法を守り行うことによって証明しようとしていました。神様の言葉を自分の正しさを証

明する手段としました。そうであれば、もう神様は必要ありません。手段である神の律法さえあればよいのです。証明したいのは自分の力、自分の正しさです。

イスラエル人と外国人、2つのグループが敵意をもって対立、分裂しています。なぜ敵意が生じるのでしょうか。その源は、自分こそが正しい、自分の正しさに固執する心であることを、聖書は示していると思います。そして自分の正しさを証明するものは自分自身の力である。これが「自分中心」ということだと思います。「自分中心」は私たちの心の中に隔ての壁を高く築きあげます。その壁の内側に神様はいません。この壁は私たちの霊的な目を遮ります。私たちに命を与え、愛してくださる神様を見えなくしています。神様なんて知らない、神様なんていなくても自分の人生は自分の力でうまくやっていける。こうして私たちの人生から神様を締め出し、自分の人生を自分の手で頑なに握りしめています。そしてこの「自分中心」の隔ての壁が、隣人とのまことの和解をも阻んでいるのだと思います。このような人生を歩み続けているあいだは、心休まる時、本当の平安はやってきません。

生まれながらに私たちの心の中にある「自分中心」は、固い岩盤のようなものです。まことの神様と私たちの間を隔てている壁は、この岩盤を土台としてしっかりと立っていて、人間のどんな努力によっても、土台から破壊することはできません。

この壁を壊すことができるのは、キリストの十字架のみです。イエス・キリストは、この隔ての壁を打ち壊すために、私たちのところに来てくださいました。キリストは、私たちの「自分中心」という罪を身代わりとして負って、十字架にかかってくださいました。神様への敵意を滅ぼしてくだ

さいました。このイエス・キリストを救い主と信じる私たちに、キリストの正しさ、という衣を着せてくださいます。自分自身で自分の正しさを証明する生き方から、私たちが自由にしてください。この自由さの中で、私たちが愛して下さる本当の神様とともに歩む人生が始まります。

まことの神様と和解し、自分の正しさに固執する生き方から自由にされたとき、隣人との関係も新しく始まります。自分を守るために、自分と異なる人々を敵視するような生き方からも、解放さ

れるはず。異邦人もイスラエル人も、朝鮮人も中国人も日本人も、琉球もアイヌもやまとも、障がい者も健常者も、女も男も、その違い、多様性は、もともと神様から与えられた豊かさです。キリストの十字架を通して、一つのからだとして和解させていただくならば、究極的な意味での「平和」が実現します。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。」まことの「平和」を祈り求めつつ、今年も一年歩んでいきましょう。（2015年1月5日放送）



「キリストへの時間」会計報告

		自 2014年4月 1日	
		至 2015年3月31日	
収 入	金 額	支 出	金 額
献金及び記念誌販売	4,368,983 円	電波料及びフォロアップ ・会報発行費等	4,828,273 円
前期繰越金	691,471 円	次年度繰越金	232,181 円
合 計	5,060,454 円	合 計	5,060,454 円

献金内訳

「教会・学校・個人献金」		名古屋学院関係	
日キ教団教会		学法・名古屋学院大学	
教会・・・27口	346,000 円	キリスト教センター（協力金）	320,000 円
愛知西地区		学法・名古屋学院	
教会婦人会連合	15,000 円	名古屋中学・高等学校 （クリスマス献金）	80,000 円
合 計	361,000 円	学法・名古屋学院（協力金）	
改革派教会		合 計	500,000 円
教会・・・32口	452,874 円	岐阜済美学院関係	
中部中会会計	300,000 円	学法・岐阜済美学院	200,000 円
信徒研修会礼拝献金	77,054 円	中部学院大学宗教委員会	10,000 円
中会連合婦人会	10,000 円	合 計	210,000 円
中会長老会2口	28,550 円		
合 計	868,478 円	<註記・個人>	
金城学院関係		日本基督教団・・・98口	927,505 円
みどり野会	300,000 円	日本キリスト改革派教会・・・31口	165,000 円
学法・金城学院（協力金）	1,000,000 円	合 計	1,092,505 円
学法・金城学院	80,000 円		
金城学院高校生徒会会計	10,000 円		
合 計	1,318,000 円		



「キリストへの時間」 放送継続へのお願い

ラジオ放送「キリストへの時間」にご支援をいただき心より感謝します。「キリストへの時間」は、日本キリスト改革派教会中部中会および日本基督教団中部教区より各2名、南長老教会日本ミッションより1名、金城学院、名古屋学院、岐阜済美学院より各1名が、それぞれの構成団体により委員を選出し協力委員会を組織しています（「キリストへの時間」協力委員会規定第3条より）。私は今年5月の「キリストへの時間」協力委員会で委員長に互選されました。委員長としての役割の一つに、放送を継続してゆくための財政基盤を整えてゆく務めがあります。しかしながら、放送運営は大変厳しい危機にさらされています。

過去10年間の収入、支出状況の一覧表を作ってみました。そのうち、収入が支出を上回ったのは2年だけです。特に2008年度は収入不足が激しく、繰越金を多く持てなかったため、翌年7月発行の会報で緊急アピールをさせていただきました。幸いなことに、これに应运えていただく大口の個人献金がささげられ、危機を乗り越えることができました。しかしながら、2011年度以降は毎年40~50万円支出超過となり、2015年度への繰越金は232,181円となりました。この原稿を書いている6月10日現在、電波料の支払いを待っていただいている状態です。次年度以降の放送継続は難しいと言わざるを得ない状況となっています。

昨年度は、ひと月の運営費が40万円を超えました。要因の一つに消費税の増税を挙げることができます。「キリストへの時間」会計には人件費支出はなく、支出項目の殆どに消費税がかかっています。昨年4月に、消費税が5%から8%になったことで、消費税相当分をだけでも約15万円の支出増となりました。今後、消費税が10%になると、負担はさらに重くのしかかります。一方、献金収入に消費税は加えられません。同じ理由で教会会計も苦しくなっていると思いますが、支出の大部分を電波料が占める「キリストへの時間」のような会計は、尚更堪えるのです。

すれば、電波料を下げてくださいしかありませんが、CBCは開局以来のロングラン番組ということもあり、格別の価格で放送を引き受けてくださっています。しかし、その上で交渉させていただいたところ、電波料の値下げを検討してくださっています。誠に感謝なことです。このことは「キリストへの時間」が良質な放送を続けていることへの信頼であり、期待とも受けとめています。

財政を健全化するための方策は、「収入を増やすことと、支出を減らすこと」この二つしかありません。収入増のためには、献金額と献金口数が増えるしかないのです。これまでも支援していただいている方には、消費税分を意識していただくと幸いです。それぞれの家計を圧迫していることを承知した上でのお願いです。そして何よりも、支援者のすそ野が広がることを望んでいます。

これまでも多くの方々の祈りとお支えによって放送伝道の働きを続けることができましたが、今あらためて見えざる神の御手が働かれていたことを感じています。ラジオの電波は、教会のない地域にも届いています。ラジオから聞こえてくる福音を楽しみに、1週間の歩みを始められる方がいらっしゃいます。

支出を減らすことについては、説教者には手弁当での奉仕をお願いし快く引き受けていただいています。加えて、CBCまでの交通費も辞退される方が殆どです。可能性があると

委員長に選ばれたとき、「長きにわたるご支援をありがとうございました」そのような文章を書かなければならないのかと覚悟しました。しかし、もうひと踏ん張りしようと思いましたが、聖霊なる神さまに背中を押されて、「放送継続へのお願い」の文章を書いています。ご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

「キリストへの時間」会計〈2005年度～2014年度〉

年 度	単年度収入	単年度支出	次年度繰越金
2005	4,423,767	4,707,228	1,083,488
2006	4,400,257	4,529,111	954,594
2007	4,476,947	4,527,156	904,385
2008	4,030,604	4,467,909	467,080
2009	6,275,069	4,927,015	1,815,134
2010	4,822,763	4,634,667	2,103,230
2011	4,019,995	4,590,732	1,532,493
2012	4,018,082	4,449,166	1,101,409
2013	4,179,318	4,589,256	691,471
2014	4,368,983	4,828,273	232,181

「キリストへの時間」協力委員会

委員長 田口 博之



「献金及び応答者に関する報告」

個人献金者

神田 輝夫 奥田 英子 松本 勝正 堀田 時男 小幡 伸幸 小幡美智子 岩佐 敏志
 菊池すも子 林 滋 小林 成隆 長津 栄 馬場 伸直 馬場 暁美 加藤 順子
 榎本久美江 阿閉佐代子 尾関 明 尾関 静枝 森田 皓三 大島 隆 浅野 律子
 真山 成子 井上 文子 本間 愛子 田口 博之 堀江 桂子 下村 徹嗣 太田 弘子
 福田 忠徳 桑原 茂 羽野 浩雪 広瀬 牧夫 広瀬 信子 長谷川正志 中根 汎信
 中根 文江 井上 晶子 草野 勝男 草野 幸 吉住 早苗 高田 俊夫 木村 幸夫
 西堀 則男 小川 澄三 小川 和子 塚本 章 粟田 昌子 服部 治昭 塚田 昇
 木村 艶子 三輪 淑子 野田 和子 伊藤まり子 伊藤きみ江 町田 隆哉 河村 輝明
 足立 克己 桑原 道子 鷺津メリー 長谷川正一 富田 鈴子 前田 栄子 井上 義明
 伊藤 忠男 宮内 英夫 篠田 潔 藤本 岩夫 藤本キク江 中野 悦子 横田 岳人
 横田 雅美 岩淵 正樹 奥山 一郎 奥山 貴子 村瀬 文男 安達 昭子 神戸 一子
 磯井 和子 堀江 桂子 藤澤 禮子 鷺尾 勝子 三田村苗美 深谷みち子 関 光徳
 児島千香子 天沼 康司 伊藤 通世 榊原いずみ 柘植 富子 竹内 喜保 新美 洋子
 井戸美代子 横山 良樹 横山ゆずり 木村智恵子 村瀬 明子 水野 開子 成井 和子
 松田 喜代 榊原 光意 榊原 春代 田口 靖章 田口 愛子 竹内 勲 山田 紀子
 安野美根子 新海 洋子 宮地 潤子 竹内 織江 榎本 弘子 松下 暁子 藤條 聡彦
 藤條 淳子 藤條 聡美 村上 聡恵 藤條 聡杏 黒木伊津子 大谷 京子 太田 泰子
 柴川久仁子 戸田喜代子 近藤 直美 伊藤八千穂 匿名3口 無記名1口

日本基督教団

尾張一宮教会 豊橋教会 豊山教会 岡崎教会 豊田教会 愛知守山教会 高蔵寺ニュータ
 ウン教会 春日井教会 刈谷教会 天白教会 御器所教会 中京教会 半田教会 鳴海教会
 鈴鹿教会 金城教会 金城教会福祉社会委員会 尾陽教会 華陽教会 名古屋桜山教会
 南山教会 大台めぐみ教会 名古屋中央教会 瀬戸永泉教会 愛知西地区教会婦人会連合
 日進教会 名古屋北教会 熱田教会 西尾教会

日本キリスト改革派教会

静岡教会 豊明教会 高松教会 那加教会 那加教会婦人会 津島教会 大垣教会 高蔵寺
 教会 関教会 関教会姉妹会 金沢教会 岐阜加納教会 岐阜加納教会婦人会 春日井教会
 尾張旭教会姉妹会 桑名教会 中津川教会 瑞浪教会 八事教会 名古屋岩の上教会 犬山
 教会 犬山教会姉妹会 四日市教会 四日市教会婦人会 名古屋教会 多治見教会婦人会
 四日市教会家長会 名古屋教会

(複数回献金教会もあります)



「フォローアップ状況」

手紙・葉書	メール	電話	聖書贈呈
(14年) 532通	3493回	268回	15冊
(13年) 588通	3138回	286回	18冊
(12年) 724通	2521回	363回	37冊
(11年) 675通	1847回	211回	29冊
(10年) 595通	954回	319回	36冊
(09年) 528通	902回	485回	38冊
(08年) 577通	918回	456回	77冊
(07年) 614通	318回	458回	75冊
(06年) 633通	235回	625回	48冊
(05年) 538通	230回	193回	32冊

＝仕事場からの感想＝

＜メール交換者の傾向＞

ここ数年の傾向ですが、信仰生活・教会生活に関係するメールや手紙の内容が多くなりました。み言葉と祈りについては、時間を掛けて意見交換できますのは、本当に感謝です。また、心の病い、生活上の諸問題、高齢者に関わる課題には、積極的に公的機関や専門病院の利用を勧めております。介護を含め家族の置かれている状況は深刻・切実であることが分かるからです。善意や愛と共に、共に生きる方策として与えられた一つの解決策でもあります。

メール交換者は年々増加しております。電波の受信範囲は東海地区ですが、口コミによる紹介で、HP「つづえジャーナル」の利用者は全国的に成りましたから、メール交換者も自然に増加してきました。文書伝道事業として、これからもその責任を果たしてまいります。

・・・「一枚の葉書」・・・放送を聴いてお便り下さる方はほとんどが葉書です。書かれている内容は「聖書」「聖書希望」程度の用件のみです。後枠はそうになっているのですから当然です。

先日、思いがけないことが起こりました。2010年3月に一枚の葉書がまいりました。「聖書希望」のみの常滑市のIさんです。それから今まで約20数回以上の手紙の交換が続いていますが、突然電話がありました。これから事務所にお訪ねしたい、と言うものでした。用事で名古屋の港区まで来たので、立ち寄りお手紙交換のお礼が言いたい、というのです。お断りする理由も見当たらず、来て頂くことにしたのですが、実は、仕事場の近くからの携帯電話だったのです。不精の性分、人様など殆どこられないので、正に仕事場そのものです。

